企画展『本間正英展』
―バリ島の風物を描く―

本間氏は、世界各地を訪れ、そこに暮らす市井の人々を題材とした作品を多く描いています。

今回はなかでも、インドネシア、特にバリ島に取材した作品を中心に展示します。

祖先から綿々と受け継がれた伝統文化を、母の手から娘の手へと、大切に伝えるバリの日常的な光景を描いた作品からは、かつての日本の姿が思い起こされ、あたたかな人と人とのふれあいが感じられます。

機屋の人（バリ島）

※本間氏自身による作品解説を、左記の日程にて行います。この機会に、ぜひご来館ください。

日　時　10月7日(土)　午後1時30分より

場　所　ミュージアム都留　第2展示室

本間正英

一九三一年新潟県生まれ。東京芸術大学日本画科を卒業、同専攻科を修了。前田青邨、平山郁夫に師事。昭和三十二年より院展、日本水彩展等に出品。現在、日本美術院特待・日本美術家連盟会員。

会　期	10月3日(火)～22日(日)
開館時間	午前9時～午後4時30分 (入館は4時まで)
休館日	毎週月曜日・祝日の翌日 第三火曜日(10月17日)
入館料	一　般　300円(210円) 高校・大学生　200円(140円) 小・中学生　100円(70円)

(　)内は、20名以上の団体料金

都留市博物館「ミュージアム都留」
開館一周年記念秋季特別展

『芭蕉・旅・甲州展』

天和二年（一六八二）の暮れ、江戸の大火で深川の庵を焼かれた松尾芭蕉は、当時俳諧において師弟関係にあった甲州谷村（現都留市）藩国家老・高山傳右衛門繁文（俳号樂塘）の招きにより、翌年の春から夏ごろにかけての約半年間、谷村に滞在しました。

今回の特別展では、俳聖・松尾芭蕉の生涯を展望しながら、この谷村への旅と逗留が、その後の芭蕉の人生観、ひいては俳諧そのものにどのような影響をあたえていったのか、初公開の資料を含む書簡や、谷村で催された句会の巻子、真蹟などを通して明らかにします。

「月十四日」真蹟懐紙

会　期	10月28日(土)～11月26日(日)
開館時間	午前9時～午後4時30分 (入館は4時まで)
休館日	10月30日(月) 11月6日(月)・13日(月)
入館料	一　般　600円(420円) 高校・大学生　400円(280円) 小・中学生　200円(140円)

(　)内は、20名以上の団体料金

・主な展示品目

破笠筆　芭蕉画像
芭蕉筆　遺言状
「月十四日」真蹟懐紙　など

ミュージアム都留寺子屋講座より

第四回芭蕉月待講座の要旨をご紹介します。

『野ざらし紀行』をめぐる疑問
―甲州にかかわる句群―

松尾芭蕉と高山樂塘の交流を示す次のような懐紙があります。

（関防印「江川臨川」）
高山樂塘興行にて
草庵の月見ける　洛の
信徳　山素堂　各々佳作
有り　素堂月見の記ヲ書
月十四日今宵三十九の童部
（落款印「青」）

樂塘が「興行」つまり経費を負担し、「草庵」深川の芭蕉庵で開かれた月見の会の様子を伝えるものです。京都の俳人伊藤信徳、芭蕉の友人の隠者山口素堂が同席し、「月」といえば当時は八月の十五夜を指しますから、八月十四日、満月の前夜、芭蕉三十九歳の折の会であったと思われます。

さて、このような交流があったにもかかわらず、『野ざらし紀行』には、「甲州」の名前が登場するだけで、樂塘らしい存在が確認できないのはなぜでしょうか。

芭蕉の『野ざらし紀行』における甲州入りの経路については、①諏訪方面から甲州街道を江戸に向かったとする説、②東海道から富士川沿いに甲州に入ったとする説、③東海道から籠坂を越え、山中湖・谷村・大月を経て江戸へ帰ったと考える説がありますが、東海道から来たのなら、甲府に知人のいない芭蕉がそこを通る必然性はありません。

また、『野ざらし紀行』の旅の途中において詠まれた、「甲州」に関わると伝えられる句に次のようなものがあります。

（A）甲斐山中に立ちよりて
行駒の麦に慰むやどり哉
『野ざらし紀行』

（B）甲斐山中
山賤のおとがい閉るむぐらかな
『続虚栗』

（C）雲霧の暫時百景をつくしけり
『芭蕉句選拾遺』

（A）は共に旅してきた馬が麦を食べてくつろぎ、自身も旅の疲れをいやしている様子を、（B）はむぐら（雑草）生い茂る宿が無口なきこりの様に門を閉じている様を、（C）は富士山の姿が雲や霧で様々に変化する様を表したものであり、（C）の句の書かれた懐紙には「甲州吉田に所持の人あり」との記述があります。従って、これらの中で芭蕉は③の経路をとったと考えられます（ただし、この句は甲州で詠まれたものではありません。芭蕉が甲州を通過したのは貞享二年夏ですが、この句の「雲霧」は秋の季語です。『野ざらし紀行』出発の折、貞享元年秋に詠まれ、持ち歩いていたものを一宿の礼として置いていったものと推察されます）。

芭蕉が甲州を通ったのは旅の終わり、江戸に入る直前ですが、『野ざらし紀行』の末尾では別れの句が続き、人物の名前ばかりが目立ちます。『野ざらし紀行』に樂塘の記述がないのは、ここで彼の名前を出すのはあまりに重く、文学作品としては甲州に立ち寄ったとさえいえればよかったのでしょう。ですが、樂塘の存在があればこそ、芭蕉は甲州への路を選んだのであり、その交流の実態はいくつかの句や書簡が伝えています。

第六回芭蕉月待講座
「芭蕉・旅・甲州展」のみどころ

日　時　10月24日(火)
午後6時30分～7時30分